

## 【書評】

### 川俣雅弘『経済学史』

培風館, 2016年, X+307頁

### 柳沢哲哉『経済学史への招待』

社会評論社, 2017年, 221頁

川俣著と柳沢著は方法面で対照的な通史である。前者は理論史であり、後者は思想史である。川俣著は自然科学史の方法概念であるクーンのパラダイム論とラカトシュの科学的研究計画 (SRP)、さらに、ポパーの反証主義も援用して経済学史の理論史を構築しようとしている (中心的テーマはミクロ経済学の資源配分理論の展開であり、その理論的到達点を一般均衡論とゲーム理論としている)。構成としては以下のように編年史的になっている。〔重商主義とフィジオクラシー, スミスと経済学の成立, リカードの経済学, イギリス古典派経済学の展開: マルサスとミルの経済学, マルクス経済学, 限界理論の先駆者と競争市場の理論, ジェヴォンズの経済学, ワルラスの一般均衡理論とローザンヌ学派, メンガーの経済学とオーストリア学派, マーシャルの経済分析とケンブリッジ学派, ケインズとマクロ経済学の展開, 一般均衡理論の展開, 社会的選択と厚生, ゲーム理論と現代経済学の潮流〕という展開である。それぞれの章について、各学説、各理論の現在の到達点の貢献を交えながら図表・数式を用いて説明しており、近・現代経済学の学説・理論に通暁している研究者・学生にとっては得るところが多いのであろうが、それぞれの意味合いに不分明な者にとっては迎れないところがある。そもそも、理論の政策的意味合いや現実経済社会との具体的関連は不問に付して本書を展開しようとする意図が垣間見えるので

ないものねだりかも知れない。それよりも、もし、クーンのパラダイム論とラカトシュのSRPの方法論やポパーの反証主義を全面的に使って首尾一貫した経済理論史を構築しようとするなら「1.1 科学とは何か: 科学史研究によって明らかになったこと」においてマーク・ブローグの古典的論文 (HOPE, 7 (4), 1975) に触れなかったのはなぜか。今後、版を重ねる際にはこの点を考慮に入れてもらいたい。自然科学的経済学理論史の叙述のためには、伝記・経歴・社会的背景などに寄り道せず厳密に禁欲的に展開していくことが望まれよう。それにしても唐突に各学説・理論の説明の箇所でも古典的経済思想家と現代経済理論家が多数登場させられて、予備的知識のない読者はとまどってしまうであろう。著者の書き方は、読者にかなりの経済的知識、経済理論についての専門知識、学史的・思想的知識を前提とした叙述に終始しているのについていくことが困難である。最終章の「5.6 経済学史と経済学のヴィジョン」の問題点として、川俣氏の通史概念の限定性と川俣氏の学史観について指摘しておきたい。同じ時代に異なる科学的研究計画 (SRP) が競 (共) 存しているとはどういうことなのか。資本主義社会についての相対立・競合する見解や理論があるというのならより具体的に例をあげて説明してもらいたかった。参考文献については各章ごとに一次文献 (原典) と二次文献 (研究書・研究論文) をあげるべきであった

ろう。学史研究の初学者にとっては誠に不親切な作成の仕方である。今後、検討してもらいたい点である。全体としての読後感としては、近・現代経済学を基準とした理論史として水準の高い著作といえようが、いくつかの現在の理論が唐突に投入され、古典との関連が辿りにくくなっている。著者本人の意識の中では理解しているのであろうが読者にはついていくのが困難な書き方に終始しているといわざるを得ない。

柳沢著は社会思想史・経済思想史・経済理論史のハイブリッドを目指しているように思われる。以下、章を追いながら特色や問題点をあげていこう。古代・中世の経済思想を取り上げる場合、特に、社会・政治思想と経済思想との関連について注意して書くべきである。プラトン、アリストテレス、聖書、トマス・アクィナスの場合、経済思想が社会・政治・宗教思想の中に埋めこまれており、そのことを意識して書くべきであったろう。重商主義のとりあげ方では、前期重商主義と後期重商主義に分けて、前者では貿易理論をめぐる論争（外国為替や貨幣数量説など）を中心に論じ、後者では人口論争や貿易差額説をめぐる論争を通じて、ヒュームやステュアートの経済思想をうかがわがらせており、妥当なところである。重農主義については、その出現の背景とケネー「経済表」について判り易く説明している。市民社会論の系譜の箇所では社会思想史的系譜から経済思想史的系譜への説明に結びつかせ、その流れからスミス『道徳感情論』の説明がなされ判り易い。古典派経済学創設者スミスについては、『国富論』から適切な引用を肌理細かく行ない、スミスを理論史的側面から「セー法則」確立者とし、マルクス、ケインズによるその批判ということにも触れている。マルサス、リカードウにおける古典派経済学の展開、歴史学派的の経済

学についても、適切な引用を積み重ねて叙述が具体的に展開されている。本文での説明が煩雑にならないように、トピック欄を設けて学説史上の重要な理論・論争などをここで説明しているのも著者の特筆すべき工夫である。時代の流れの中で支配的となる特定の経済思想・経済理論について、学説史上、共通認識となっている事柄をめぐってバランスのとれた書き方をしており読者の理解を促進するようにしている。マルクス経済学の系譜の説明は、講座派對労農派で終わっており、その後の第二次世界大戦後の日本における市民社会的マルクス論の系譜との関連には触れていない。特に、水田洋、平田清明、内田義彦、大塚久雄との関連に触れていない点は惜しまれる。新古典派の前提としての「経済人」についても、丁寧に説明し、思想的に相容れない「近経対マル経」の対立についても言及している。また、スミス→マーシャル→ハイエクという設計主義批判の流れを想定し、マーシャルにおける社会の累積的変化の積み重ねの認識を評価しているのも妥当な見解である。経済社会の現実的状况とその変容に対応してそれらを説明する経済理論が出現する経緯を具体的に説明しており、この書き方は本書全編を通じて貫徹している（20世紀の例では、1930年代の経済学とケインズの経済思想の箇所）。エピローグでは、「経済学の歴史を振り返ることで複雑な経済現象を扱える万能の経済学説が存在しえないことが理解できたであろう」（218）としており評者もこの表明に同意するものである。それぞれの経済学説の時代的・地域的な有効性と限界性を指摘することで、それぞれの経済学の限定的妥当性を示したことが本書のメリットである。

（石井信之：青山学院大学名誉教授）